

第1回世界災害医学会バーチャルシンポジウムに登壇しました（2021/5/14-15）

テーマ：Response, Resilience, & Reset
会場：オンライン（グローバル）

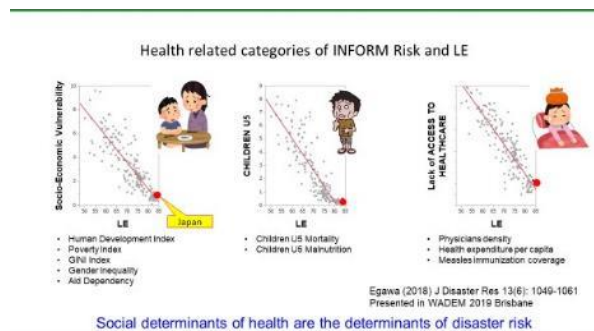
2021年5月14-15日（金-土）、世界災害医学会（WADEM）が主催する第1回バーチャルシンポジウムにおいて、当研究所の江川新一教授（災害医療国際協力学分野）が講演を行いました。世界各地に発表者と聴講者がいるため、日本時間14日（金）午前7時30分から始まり、世界各地から約50名の参加がありました。

世界災害医学会は、世界中の災害医療関係者が一堂に集い、災害医療をとりまくあらゆることについての知見と経験を共有し、災害における健康被害の低減、効率的な災害保健医療支援、次の災害への備えの強化をする学術集会です。これまで学術集会はすべて対面で開催されてきましたが、新型コロナウイルスパンデミックの影響により、はじめて完全オンラインでシンポジウムを行うこととなりました。このバーチャルシンポジウムは、当初2021年5月に東京で開催される予定だったWADEM 2021 Tokyoが2022年に延期されたことも関連しており、東日本大震災から10年の節目にあたって、日本災害医学会との共同開催で行われたものです。

江川新一教授は「レジリエンスの科学：健康な社会は災害にレジリエントな社会」と題して、これまでわが国が度重なる災害に襲われながらも、防災（disaster risk reduction）とよりよい復興（build back better）によって、災害の被害を軽減し速やかに回復するレジリエントな社会をどのように作ってきたか、わが国が世界の中でも先端をいく災害医療体制をどのように作り上げてきたのか、平均寿命が長いわが国が災害にレジリエントなのはなぜか、などについて解説しました。平均寿命が高いことは健康を左右する社会的因子がよく保たれていることを意味しており、それが災害に対するレジリエンスを形成していることがよく理解され、高い評価を受けました。

新型コロナウイルスパンデミックも災害として対応し、そのリスクを減少させ、よりよい社会体制に復興することで、これからの被害を少なくすることが可能です。災害医学と一般の医学、また医療・保健セクターと防災など他のセクターとの相互理解、協力、協調がよりレジリエントな社会をつくることにも言及しました。

オンラインでの開催は、遠隔地から参加でき、発表や議論への集中度が高まり、後日見直すことが可能となるなどのいい面もあります。一方、災害対応において、顔の見える関係も大変大切です。学術集会を通じて、考え方を学び、議論することで、よりよい防災と災害対応につながります。



災害リスク因子と平均寿命の相関関係



発表後の質疑応答

文責：江川新一（災害医療国際協力学分野）